

酒田市立資料館 第228回企画展

酒田の芸妓

港町の料亭文化を彩り、芸に生きた女性たち

令和4年11月19日(土)～令和5年2月12日(日)

全国各地の船が行き来する物流港として繁栄した江戸時代の酒田。船を降りた船乗りたちが羽を伸ばしたのが、「三遊所」と言われた今町・船場町・新町（高野浜）の遊所です。なかでも商談や接待に使われ、高い格式を誇った今町は、全国の遊所番付で東前頭七枚目に入るほど、名前が知られていました。そのにぎわいは明治以降、今町・台町界隈に発展した料亭街へ受け継がれました。

宴席の席に踊りや唄、三味線などで花を添え、お客をもてなした芸妓の存在は、酒田港繁栄の象徴のひとつです。大正から昭和にかけての花柳界全盛期には、100人を超える芸妓が芸を磨き、今町と新町に分かれて競い合いました。

その活躍の場はお座敷にとどまりません。港座では毎年のように発表会が開かれ、山王祭（酒田まつり）などのイベントでも市民を楽しませました。酒田を全国にPRする観光大使的な役割も担いました。

戦後、生活様式の急激な変化により芸妓の数は減少し、その歴史は幕を閉じる寸前でしたが、平成2年に「舞娘さん制度」がつくられ酒田舞娘として復活。今日まで伝統の灯がつながっています。

酒田舞娘の育成に尽力し令和2年に亡くなった力弥など、主に昭和期に活躍した芸妓たちを紹介し、明治以降の酒田の花柳界の歴史をたどる展示です。

明治～大正の酒田の芸妓

新町・今町に分かれて芸を競う

港町酒田の料亭文化のルーツは、北前船の時代に酒田湊の繁栄を支え、「酒田三遊所」として広く知られていた今町、船場町、高野浜（新町）にあった遊所です。特に格式の高かった今町は、江戸時代後半に出された全国の遊所番付で東前頭七枚目になっています。

全国各地からやってきた船乗りたちは、酒田の芸妓が披露する踊りや唄を楽しみながら、長い航海の疲れをいやし、大いに羽を伸ばしていたのでしょう。

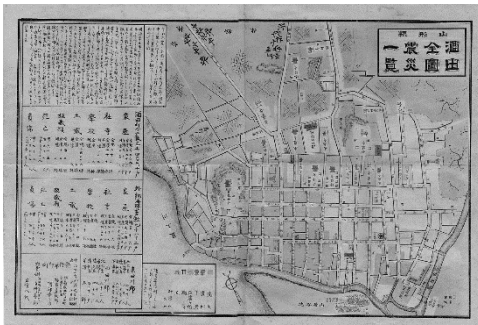
しかし明治27年(1894)の庄内地震により今町、船場町の遊所は大きな被害を受けます。その後、県の命令によって酒田の遊所は新町一か所に限定され、今町、船場町で貸座敷業を営んでいた店の一部は新町に移転します。料理屋に転業した店が残った今町の一部は、料亭街としてにぎわいを取り戻していきました。

この時代、師匠として芸妓の踊りや唄、三味線など芸の質の向上に力を尽くしたのが、名妓とうたわれた吾妻屋辰枝、その姪である今咲屋咲江の二人です。辰枝は新町の芸妓に、咲江は今町の芸妓に稽古をつけました。厳しく仕込まれた芸妓たちは、新町と今町の二派に分かれて芸を競うようになります。ほかに、踊りの小野定江、糸木屋米八・梅香母娘、三味線の山木小磯といった師匠たちの指導を受け、芸を磨いた芸妓たちの評判は高まります。大正から昭和の初めには芸妓の人数は100人を超え、酒田の花柳界は最盛期を迎えます。



酒田の芸妓の絵はがき／大正

相馬屋のとん子、今咲屋のきぬ子、香梅咲のかの子が「庄内おばこ」の振り付けでポーズをとっています。



酒田全図震災一覧／明治27年(1894)

明治27年10月22日に起こった庄内地震の被害状況を記した絵図。当時の酒田町で162人が亡くなっています。赤く塗られているのが火事による焼失地域。遊所のあった今町から船場町まで広範囲にわたって火災が起きたことが分かります。

新町芸妓に藤間流の踊りを教える

あずまやたつえ
吾妻屋辰枝

天保8年(1837)～大正10年(1921)

酒田今町(現在の日吉町)に生まれ、若いころに芸妓になりました。いわゆる「美人」ではありませんでしたが、才気煥発で芸道にすぐれ、戊辰戦争後に酒田に来た官軍将兵らにもてはやされました。

明治3年(1870)、酒田民政局会計だった山本友右衛門とともに上京しますが、山本は酒田勤務中の会計について責任を問われるなかで無念の死を遂げました。辰枝はその後、浄瑠璃、常磐津、太棹(三味線)を、それぞれの家元などから習い、奥義を極めました。

明治8年(1875)に酒田に戻ると、今町で諸芸の師匠として指導に当たり、後に新町で芸妓の置屋「吾妻屋」を営み、新町の芸妓たちに藤間流の踊りを伝えました。

享年85歳。善導寺に門下生たちが建立した石碑があります。



善導寺にある吾妻屋辰枝の石碑

今町芸妓に花柳流の踊りを教える

いまさきやさきえ
今咲屋咲江

安政2年(1855)～大正15年(1926)

酒田今町(現在の日吉町)の料亭・今咲屋(今清楼)に生まれた咲江は、吾妻屋辰枝の姪に当たります。

藤間流の踊り、山田流の箏(そう)を学んで免状を受け、師匠として多くの門下生を指導。才能を見込んだ少女を養女にして芸を仕込み、相馬屋から芸妓として出しています。

大正8年(1919)、上山で見た花柳寿三郎の踊りに魅せられ、寿三郎を酒田に招いて花柳流を伝え始めました。叔母である辰枝は新町の芸妓に藤間流の踊りを、咲江は今町の芸妓に花柳流の踊りを教え、新町・今町の芸妓は芸を競い合いました。

咲江は、後に旅館になった今咲屋の主人でもあり、詩歌、俳句、囲碁、将棋、書画にも通じ、酒田を訪れた名士からも一目置かれました。

享年72歳。没後の昭和7年(1932)、善導寺の境内にその功績をたたえた石碑が、門下生たちにより建立されています。



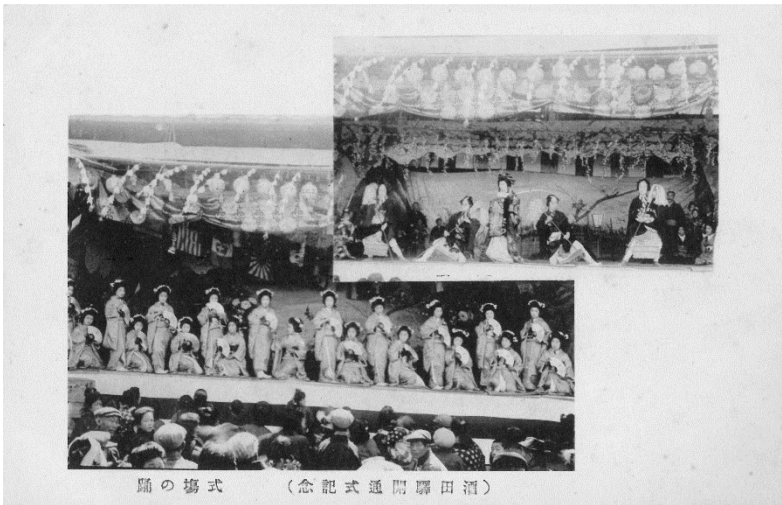


迎歡の線港臨 (念記式通開驛田酒)

「酒田駅開通記念」絵はがき

上：臨港線の歓迎 / 下：式場の踊り
大正4年(1915)

大正3年(1914)12月、陸羽横断鉄道酒田線が開通し酒田駅が開業。翌年4月には臨港線が開通し、日和山で開かれた祝賀会では、半玉も含めた今町と新町の芸妓140人が盛大に踊りを披露しました。



踊の場式 (念記式通開驛田酒)

芸妓の装い

芸妓の正装は「黒紋付」です。あでやかで粋な芸妓のいでたちといえば、裾引きの黒紋付に博多献上帯を合わせた姿が思い浮かぶのではないのでしょうか。

芸妓には「左^{ひだりづま}褌」という呼び方がありますが、芸妓がこのいでたちで歩くとき、着物が汚れないように、左手で褌(裾の端)を持ち上げることに由来するそうです。



黒紋付を着た芸妓が写る写真／昭和
(個人蔵)

昭和の酒田の芸妓①

幼い頃から稽古を積んだ芸妓たち

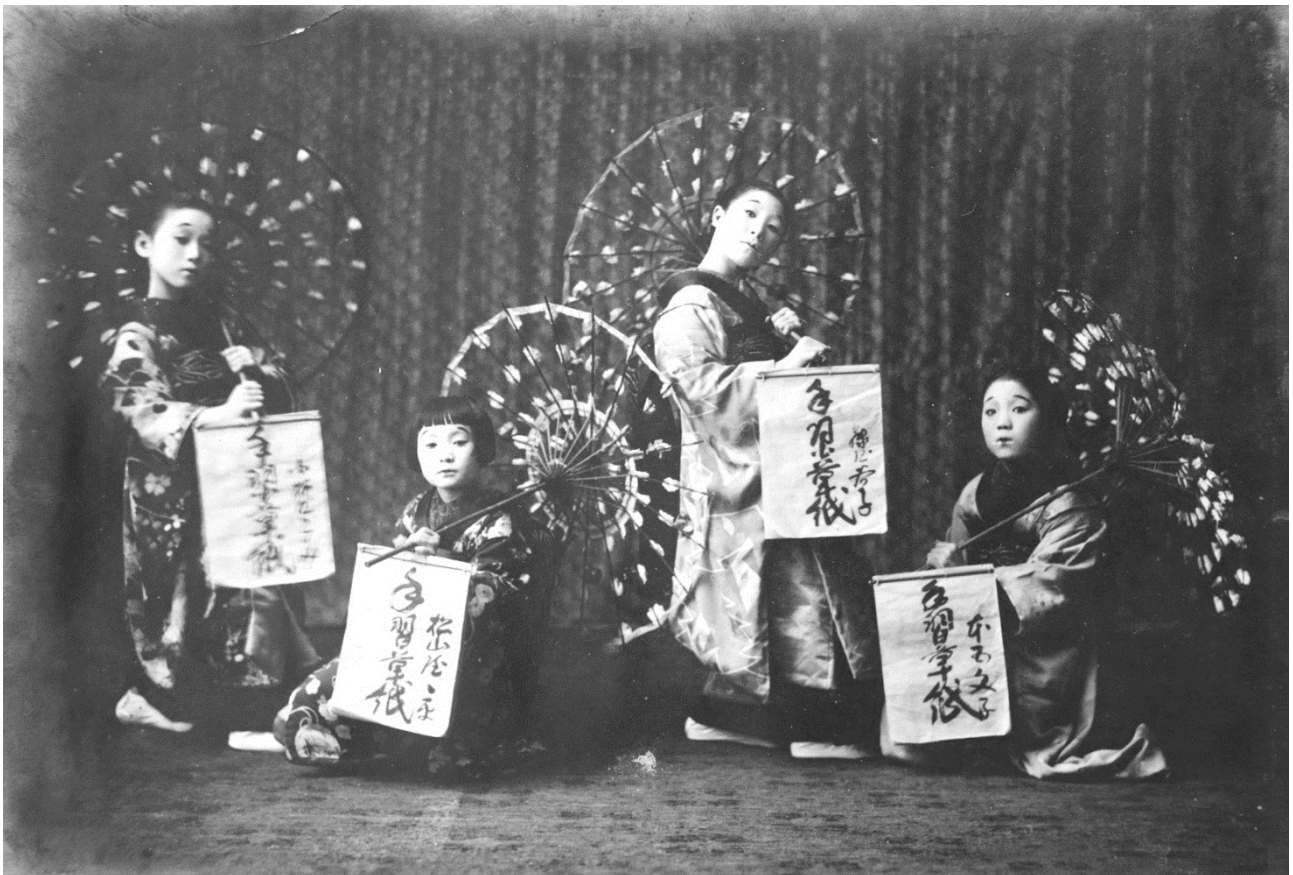
最盛期を迎えた昭和初期の酒田の花柳界では、多くの芸妓が活躍しました。芸妓は年齢によって呼び名が違いました。14、5歳で「舞子」、16～18歳くらいまでは「半玉」、19歳で一人前である「一本」と認められ、^{ねえ}姐さんと呼ばれるようになります(人によって1歳くらいのずれはありました)。

一本になるまでの道は険しく、ただ踊りが好きだからなれるという生易しいものではありませんでした。10歳にもならないうちから、料亭や貸座敷、芸妓の置屋に預けられた芸妓見習いの少女たちは、学校に通いながら芸事全般にわたって稽古を積み、行儀作法や美しい所作を身につけました。稽古は厳しく、文字通り血のにじむような努力を必要としたといいます。

この頃、芸妓たちのさらなる芸の向上に貢献したのは、芸事が好きで財力のある、いわゆる「旦那衆」でした。特に中町でレストラン「商興倶楽部」を開いた大谷孫一は、踊りの藤間勘四郎、長唄の杵屋勝丸、杵屋勝東治、鳴物の望月佐吉などの師匠を、私費を投じて中央から招きました。自宅をけいこ場として開放し、秋には港座でおさらい会も催しています。

高い技能を身につけて名取になった芸妓も多く、長唄の杵屋勝寿恵、踊りの藤間勘志げなどは、師匠として後進の指導に当たっています。

参考：田村寛三著『酒田遊所の賑わい』



長唄「手習子」を踊る芸妓見習いの子どもたち／昭和（戦前）

向かって左から、小林屋のこのみ、松山屋の^{ちよんべい}平、緑屋の若子、本五(本五楼)の文子。このみ(好)は、藤間流の名取となり師匠として活躍しました。^{こやっこ}平は後に小奴と名前を変え、やはり藤間流の名取となって男踊りの名手と言われました。



レコードの宣伝イベントで撮った記念写真／昭和10年(1935)

山形新聞の企画でコロムビアレコードから発売された新民謡「山形よいとこ」「浮かれおぼこ」の宣伝を兼ね、昭和10年の1月31日から2月7日まで、蜂屋時計店・本城屋レコード部・中村書店・酒田蓄音器商会主催の素人参加舞踊大会が映画館「中央座」で開催されました。

イベント開催中、本五楼の文子、福千代の福助、松山屋の金時とゝ平、小林屋のこのみ、富月の千太という半玉6人が、藤間繁子の振り付けによる踊りを毎日披露しました。

大会で優勝したのは、写真中央で優勝カップを持つ、西平田村大町の小野寺信子さん(10歳)。向かって左隣が、写真を持っていたゝ平(小奴)です。



小奴(藤間勤ゆき)が
踊る姿／昭和

幼いころから松山屋の芸妓として稽古を積んだ小奴。酒田で藤間流の踊りを教えた藤間勤志げの下で学び、昭和22年、25歳で名取になりました。藤間流での芸名は藤間勤ゆきです。

左は江戸時代のシャボン玉売りを描いた清元「玉屋」を踊る姿。小奴が得意とした男踊りです。右は演目が不明ですが、きりりとした小奴らしい雰囲気があります。



相馬屋の芸妓、
えみこ
笑子とよし丸の子ども時代／昭和(戦前)
(個人蔵)

幼いころに相馬屋に預けられ、学校に通いながら修業を重ねた笑子とよし丸。今見ても十分におしゃれであか抜けた洋服を着ています。

酒田を代表する料亭だった相馬屋では、店の名前に恥じないように、芸妓見習いのふだんの服装にまで気を配っていました。



鳴り物の稽古をする芸妓／昭和
(個人蔵)

酒田で鼓や太鼓などの鳴り物を教えていたのは、県内でただ一人の名取だった望月左喜枝でした。向かって左から、相馬屋の浅香、同じく笑子、小幡の五郎。右端の芸妓の名前は不明です。



名取のお披露目で「連獅子」を踊る笑子(藤間富美四)／昭和

相馬屋の笑子は、昭和24年頃に藤間流の名取となり、藤間富美四を名乗りました。港座でお披露目を行い、一緒に名取になった小幡の五郎(藤間流の芸名は藤間齊四)と二人で長唄「連獅子」を踊りました。

芸妓から長唄の師匠になり後進を指導

きねやかつすえ
杵屋勝寿恵

明治38年(1905)～平成6年(1994)

本名は池田スエ。新町(現南新町)に生まれ、7歳で芸妓の置屋・松村屋に預けられ、小学校に通いながら三味線などの芸事を学びました。芸妓時代の名前は小萬です。

大谷孫一が招いた長唄の杵屋勝丸、勝丸が亡くなった後は杵屋勝東治(俳優の若山富三郎、勝新太郎の父)に師事。昭和5年(1930)に名取になり、長きにわたって指導に当たりました。

昭和53年(1978)の第22回市民芸術祭で酒田芸能連盟から「芸術、文化の向上に貢献」したことにより感謝状を受けています。

妹は踊りの師匠として活躍した藤間勘志げです。



戦時下の酒田の芸妓

昭和12年(1937)に日中戦争が始まると、国内では本格的に戦時体制が整えられます。市民の生活はさまざまな制約を受け、芸妓たちを取り巻く状況も大きく変わっていきました。昭和14年(1939)には「皇国慰問郷土演芸団」の一員として中国大陸に派遣されるなど、出征兵士たちの士気高揚の一端を担うようになります。

昭和16年(1941)には太平洋戦争が開戦。戦況は次第に悪化し、食糧などの統制が厳しくなるのに伴い、貸座敷、料亭は商売どころではなくなりました。戦争末期には、女性や子どもたちも軍需工場で働き、食糧生産のために畑仕事をしましたが、お座敷の仕事がなくなった芸妓たちも例外ではなく、軍服の縫製工場に動員されています。



出征祝いの席で撮った記念写真／昭和

松山屋の小奴が持っていた写真。向かって左端が小奴です。



(縣形山) 國藝演土郷問慰軍皇

皇国慰問郷土演芸団の絵はがき

戦時中、山形県では「皇国慰問郷土演芸団」を結成し、県内各地の芸妓たちを日中戦争の戦地に派遣しました。慰問は昭和14年(1939)から16年(1941)まで3回行われたようです。

この絵はがきには1回目に派遣された相馬屋の小蝶、松山屋の小太郎らしき芸妓が写っています。昭和15年の2回目の慰問では、新町の貸座敷・越後屋のいろは、鶴岡の小夜子などが中国大陸に渡りました。



医療施設を慰問した時に撮影したと思われる写真／昭和（個人蔵）



講堂のステージらしい場所で踊りを披露する芸妓たち。同じ日に撮られた写真に、赤十字のマークがついた着物を着た男性たちと約30人の芸妓が写る集合写真（左の写真）があることから、医療施設に慰問に行った時の写真だと考えられます。

写真を持っていた小奴のほか、小幡の五郎、俵屋の金太郎、相馬屋の浅香などが写っています。



「大日本国防婦人会」の襷をかけた女性たちと／昭和（個人蔵）

「大日本国防婦人会」は、昭和7年（1932）に女性の戦争動員を目的に設立された組織です。昭和17年（1942）には、愛国婦人会、連合婦人会とともに「大日本婦人会」に統合されました。

この写真には、海軍の軍人が写っており、背景から船の上で撮られたように見えます。戦意高揚のために女性たちに軍の船を見学させたのかもしれませんが。



軍需工場に動員された芸妓たち／昭和19年(1944)

終戦の前年、船場町にあった軍服の縫製工場で働くことになった芸妓たちが、下日枝神社の前で撮影した記念写真です。



進駐軍の酒田駐屯隊長らを
囲んだ宴会に出た小奴／昭和

アメリカ軍の酒田進駐が始まったのは、終戦間もない昭和20年(1945)10月9日でした。

写真中央は2代目駐屯隊長のスマイレー中尉。向かって左端には当時の青塚恒治酒田市長がいます。後ろの左側に立っているのが小奴です。

昭和の酒田の芸妓②

舞台の上で本領を発揮した芸妓たち

芸妓の仕事は、踊りや唄で宴席を盛り上げ、お客をもてなすことです。お酒の席はもちろん、結婚式や大きな会合など、さまざまな場所に呼ばれて芸を披露しました。

しかし活躍の場はそれだけにとどまりません。踊り、唄、三味線、太鼓や鼓などの鳴物といった芸事全般に日々精進し、その本領を存分に発揮したのは舞台の上でした。

毎年のように港座で開催されたという発表会は、市民が心待ちにした催しのひとつとなり、客席はいつも大勢の人でにぎわいました。稽古着でもあるおそろいの浴衣を着て、日ごろの稽古の成果を披露した「浴衣ざらい」は、夏に山王くらぶなどを会場に開かれました。

5月20日の山王祭(酒田まつり)をはじめとする祭りも芸妓の舞台でした。山王祭では、祭り用の衣装を着けて屋台で踊り、山車行列に花を添えました。また今町の弁天さん(日吉町の厳島神社)の夏の夜会式では今町芸妓が、新町稻荷神社の夜会式では新町芸妓が、盛大に手踊りを披露しました。

美しく舞う芸妓にあこがれて踊りを始めたという人もいて、芸妓の存在は、現在私たちが思う以上に一般の人たちに近いところにあっただと言えます。

参考 田村寛三著『酒田遊所の賑わい』



港座での発表会／年代不明

子どもが舞台にかぶりつきで芸妓の踊りを見ています。



港座で踊る芸妓／昭和



港座で唄と三味線を披露する芸妓たち
／昭和

撮影されたのは昭和30～40年代だと思われます。公演タイトルや演目は不明ですが、華やかな踊りだけでなく、唄や三味線など地方の技を磨いてきたベテラン芸妓たちが勢ぞろいした様子は圧巻です。



浴衣ざらいで踊る力弥／昭和30年代

男踊りを踊る力弥を写した写真です。

浴衣ざらいは、毎年夏に山王くらぶなどで開かれてきた稽古のおさらい会。入場無料で、たくさん見物客が集まりました。このおさらい会を主催したのは元芸妓の好。藤間流の名取・藤間好として、力弥のほか大勢の芸妓や一般の人に踊りを教えました。三味線を弾いているのが好です。



浴衣ざらいで地方を務める姐さんたち
／昭和30年代

向かって左から那美、小勝、りょう子、好、弘子の面々。那美、弘子は平成まで現役の芸妓として活躍しました。



「藤間勘四郎追善舞踊会」プログラム／昭和27年(1952)

大谷孫一に招かれて酒田で藤間流の踊りを芸妓に指導し、昭和15年に亡くなった藤間勘四郎。その13回忌を迎えた昭和27年9月28日、東京の明治座で追善舞踊会が開催され、酒田の芸妓たちも出演。「庄内姿稔の秋」と題して、「おぼこ」(庄内おぼこ)、「酒田甚句」「酒田音頭」の三曲を披露しました。

プログラムによると、踊りは静子、吉也、ひろ子、はるこ、鈴麿、染福、勝美、時子、ひな子、芳丸、おぼこ、小奴の12人。地方を務めたのは義子、良子、銀子、政子、梅香、小勝、文子、ぶん子の8人です。



酒田山王祭の行列での小奴と那美／昭和

芸妓たちは酒田山王祭(酒田まつり)をはじめ、各町の夜会式やイベントなどに花を添えました。昭和20年代に撮られた写真と思われます。男踊りを得意とした小奴と那美の半纏姿が決まっています。

半纏に書いてある「酒田見番」は、芸妓の取り次ぎや玉代(料金)の計算などを行った事務所です。この写真が撮られた頃は、港座の向かいにありました。



酒田山王祭の屋台で

お囃子を演奏する芸妓／昭和



三居稻荷神社の夏祭りで踊る芸妓

／昭和51年(1976)

踊っているのは小奴と染福。静子、弘子などが地方を務めています。

山居倉庫にある三居稻荷神社の夏祭りへの出演は、芸妓の年中行事のひとつでした。

酒田の芸妓と「庄内おばこ」

大正時代に振り付けられた現在の「庄内おばこ」

「酒田舞娘」が披露する踊りの定番といえば、朱色の前掛けにほっかむり姿で踊る「庄内おばこ」です。庄内弁で若い娘(おばこ)のことを唄う、郷土色豊かなこの民謡は、起源ははっきりしていませんが、古くから唄われてきたことは間違いないようです。

現在の振り付けは、大正時代にできたものです。石川正敏著『庄内風土記』には、大正4、5年頃、鶴岡の実業家・諏訪尚太郎が鶴岡劇場のこけら落としのために歌舞伎役者の沢村宗十郎につけてもらったと書いてあります。

一方「酒田かわら版」第56号(昭和49年3月25日)には、今咲屋咲江が東京から師匠を呼んで新たに振り付けたとあります。今となっては確かめるのが難しそうですが、酒田と鶴岡では振り付けが違っていたのかもしれませんが。

「酒田かわら版」には、今咲屋で猛練習した芸妓たちは、大正11年(1922)に東京で開催された「平和記念東京博覧会」でおばこ踊りを披露したともあります。現在、酒田舞娘が酒田の観光使節として国内外で活躍していますが、当時から芸妓が酒田のPRに一役買っていたことに驚かされます。

酒田の芸妓が踊る「庄内おばこ」は人気があったと思われ、大正から昭和にかけて、絵はがきが何種類も作られています。また大正10年と11年に酒田を訪れている竹久夢二は、庄内おばこをモチーフにした絵を描いています。



料亭の座敷で「庄内おばこ」を踊る芸妓たち／昭和（戦前）

(個人蔵)

相馬屋の笑子が持っていた写真。笑子、浅香など6人の芸妓が踊り、5人の芸妓が地方を務めています。華やかだった戦前の酒田花柳界の雰囲気が伝わってきます。場所が相馬屋かどうかは不明です。

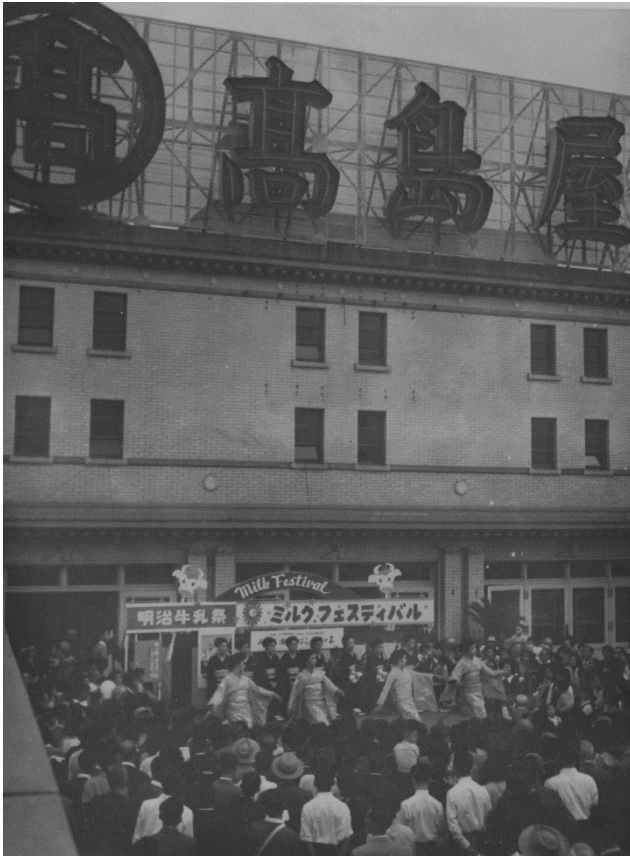
右の写真は、現在の酒田舞娘が相馬楼で踊る庄内おばこ。振り付けがしっかりと受け継がれていることが見て取れます。

東京で「庄内おぼこ」を踊り庄内をPR

昭和27年(1952)9月、30人を超える酒田の芸妓と数人の鶴岡の芸妓が、庄内の観光や物産を宣伝するために東京に派遣されました。秋季国体が宮城、福島、山形の3県で開催されるのに先立って、郷土を代表する芸能で庄内の魅力を伝えようと、酒田・鶴岡両観光協会などが主催した催しでした。

芸妓たちは、新聞社やラジオ局、酒田に工場のある鉄興社、花王石鹼、帝国石油の本社などを訪問。三越、松屋、高島屋などのデパートの屋上で「庄内おぼこ」を披露しました。

酒田で踊りを教えた藤間勘四郎13回忌の追善舞踊会に出演したのは、この時のことです。



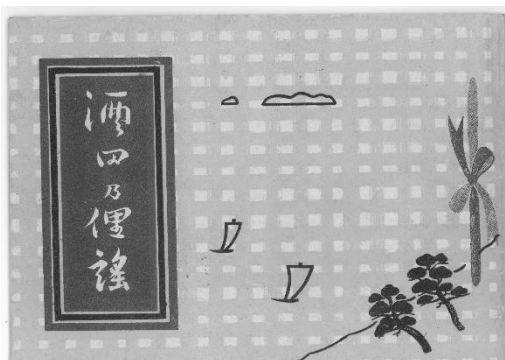
高島屋で実演中のひとコマ

前掛けにほっかむり姿ではないので、別の踊りを踊っているところのようです。



大型バスに乗って移動中も宣伝する芸妓

バスの窓から大きく身を乗り出してパンフレットらしき紙を配っています。横断幕には「おぼこ 庄内踊り 9月26、27日、都内主要デパートにて」と書いてあります。向かって一番左は染福。右から3番目は小奴です。



唄のしおり「酒田乃俚謡」^{さかたのりょう}／昭和

「庄内おぼこ」「酒田甚句」ほか県内の民謡などが載っています。料亭などで配られ、しおりを見ながら芸妓の三味線に合わせてお客さんも一緒に歌ったそうです。それぞれの唄の起源や方言について書かれた説明も、面白く読める内容になっています。

昭和20年代後半から30年代にかけて作られたものと思われます。

平成～令和の芸妓

酒田舞娘へ受け継がれる伝統

終戦後、生活様式の洋風化や娯楽の多様ななどにより日本人の暮しは大きく変化し、日本文化の集大成ともいえる料亭文化は次第に衰退しました。酒田でも平成に入り、相馬屋、山王くらぶ、小幡といった老舗料亭が、惜しまれながら閉店。花柳界も、新たに芸妓を志す人が減り、高齢となった芸妓が一人また一人と一線を退き、かつての輝きをなくしていきました。

平成2年(1990)、この状況を憂えた地元の経済人が中心となって「港都振興株式会社」を設立し、現在の「酒田舞娘」が誕生しました。舞娘の指導にあたったのは、酒田市民にも「力弥姐さん」として知られ、一昨年に亡くなった芸妓・力弥でした。当時、高齢ながらも現役を勤めて

いた那美、弘子、ぶん子、文字も若い舞娘たちをサポートしました。現在は酒田舞娘3期生だった芸妓・小鈴さんが、その後を引き継いで後進の育成に取り組んでいます。

港都振興の事業は平成12年(2000)に憐平田牧場に継承され、酒田舞娘は同年にオープンした「舞娘茶屋相馬樓」を拠点に活動しています。また、相馬屋、山王くらぶ、小幡は観光施設として生まれ変わり、令和の今に、酒田湊繁栄の象徴といえる料亭文化を伝えています。



力弥姐さんと酒田舞娘／平成
(東光カメラ提供)



相馬屋の茶の間で支度をする“大きい姐さん”たち／平成7年(1995)
(東光カメラ提供)

相馬屋の閉店を知った東光カメラの店主・東郷仁さんが、その姿をとどめておきたいと撮影した写真です。左から、那美、弘子、ぶん子、力弥。お座敷の出番に備えて三味線の調弦をしているところです。

花柳界では、長年芸妓を続けてきた姐さんを「大きい姐さん」といいます。戦前から芸妓を続け、力弥姐さんとともに酒田舞娘を支えてきた那美姐さんたちは、舞娘から大きい姐さんと呼ばれ慕われていました。

**80歳を過ぎて、相馬屋の大広間で踊る
那美／平成7年(1995)**

(東光カメラ提供)

前年に亡くなった芸妓・笑子の一周忌という特別な席で踊る那美。座布団1枚の広さで踊る「かつぽれ」は、中村勘三郎なども絶賛した那美の十八番。80歳を過ぎても見事な足さばきを披露しました。



**酒田舞娘の踊りの地方を務める弘子／平成
(東光カメラ提供)**

長年にわたり酒田舞娘の育成に尽力

りきやねえ
力弥姐さん

昭和15年(1940)～令和2年(2020)

本名は定成道子。終戦後、5歳の時に家族とともに樺太から酒田に引き揚げてきました。幼い頃から好きだった踊りを習い、元芸妓で藤間流名取の好(藤間勘好)の内弟子になりました。

芸妓になったのは15歳の時です。通常は半玉の期間を経て、19歳くらいで一本になりますが、芸に関しては天才肌だったといわれる力弥は、いきなり「一本」と認められました。また料亭や置屋に身を預けずに芸妓になっており、酒田の芸妓のなかでも特異な存在だったようです。

平成2年(1990)からは酒田舞娘の指導に当たり、同25年(2013)には観光・文化振興に貢献したことにより酒田市民表彰を受けました。

※上の写真は東光カメラ提供



師匠の好にお茶を出す、修業時代の力弥／昭和

昭和33年6月29日

サンデー庄内

(茅3種郵便物認可)

(4)

今週の話題

労働基準旋風

半玉が姿を消したわけ

花の今町と謳われた昔から港酒田は米と女で繁昌したところである。西鶴は好色一代男の与之助をわざわざ酒田まで派遣して酒田の女性を案らしている位で、元録頃は確に諸国にかくれもなき良港であり、花柳界は諸国番付でも前頭上の部に位置する隆盛を伝えられたところである。

昔の話はともかく戦争前までは酒田の花柳界は県内では勿論第一、東北では秋田に次ぐ美妓の産地として觀光客に喜ばれたものである。何しろ酒田は芸界のやかましいところである。何れも腕を練えなければならぬ土地柄で、一頃は藤間の勉強会と花柳の今町組とが互に芸を競い、芸の下手な芸者は爪弾きされた。それだけに酒田には枕芸者と称するいかかわしいものは存在を許さず立派な職業婦人として存在していた。従つて各地には温泉マータのさかさくらげがいくらか出て酒田では存在し得なかつたのである。



が差さわりがあるといけなから見合せるにしても大体平均年齢四十才を上廻るとみていい。終戦後の新顔としては宇八の染福だけ、あとは戦前の残党とよそからの渡り鳥のルートルである。

務の就業制限一満十八才に満たない者を就かせてはならない、と規定してある。その四十四項に「酒席に侍する業務」というのがある。三人はこの条の項に該当するといふのである。急振料理組合では幹部会を開き対策を協議したが名論がない。県下の同業組合に相談してみたが米沢にも鶴

ここで一人一人の年齢を書くとつとよくなるのだ

師匠好姐さんが美千子、六助で政千代、山王クラブで福丸の三人を中学卒業と同時に養成しみつちり芸を仕込んで、どうやらお座敷にも出れるし、舞台に出して踊れるようになった。したがって花柳界にどうやら新鮮な花が咲いたと料理屋さん達は喜んでいたのである。間先日、労働基準監督署から「拘え主一寸来い」ということになった。労働基準法第六十三条に「危険有害業

岡にも該当がなく結局県下では山形、酒田、新庄だけという形らしい。理屈を云つても始まらないが、危険有害業務とは何かとなると、もつと有害で危険な業務が沢山ある。薬品病等いろいろあるが、酒席というのもその危険有害の中に入るらしい。そんなら酒席でなく宴会の始まる前の郷土民謡の踊り子として舞台に出るのはどうだろう。松島トモ子だつて当時美空ひばりだつて舞台には十八才未満でも出ていたではないかといふことになつたが、この辺が一寸頭のかしげどこで広義には呑まなにいにしてお膳が出て杯がついて居れば酒席と云うと云うのである。末だ酒も運ばぬ間は酒席ではあるまいと云つて、絶対にお酌をしない場合はまあまあといふ多少の氣を利かしても料理屋としては味が悪い、知つた顔が居て「おい一杯つげ」と云われて「おらん顔もなるまい」ところが、美千子と福丸は九月で満十八才、まあまあそれまで我慢しようと思つた。政千代は来年三月にならないと出られないといふ始末。では他はどうだろう。先日新潟市の医師大会に出席した某氏

太陽に向つて 花ひらく……

あのみまわりのように、きらめ美こ意紫
く夏の下でもハツと、をとなる
日やけ止めクリームを、を
下さい。日やけの原因を、
外線を確実に吸収しますから、
これをお化粧下にお使いになれて
ば、どんな強い日ざしをうけて
も色黒や炎症をおこす
りません。

資生堂 サンスクリーン
200円

お化粧品なら
ぜにんもん
電 459

の話によれば新潟では若い半玉さんがズラリと揃つてまことにあでやかでありサビも上々、酒も運ぶといふあんばい。所かわれば法も変るのかと聞いて見たら未成年者だから飲んではいかんが酌は差支えないといふのが新潟県の現状。どうも山形県は法一点張りの固そうが揃つているらしい。

目和

酒田醤油株式会社
キツコーヒヨリ

(コツ) No.2 煮魚のコツ

魚を煮る場合の醤油は適量がある。多ければ無味で味をそこねる。一切(又は一尾を皿につける)の魚を煮る醤油は大サジ一杯見当、あつさり煮るには水一醬油一、砂糖四分の一の割合、煮立つたところへ魚を入れフタをして煮上がりが大サジ一杯の煮汁になるカツオのような長く煮るものはそれぞれ多量に。

「サンデー庄内」昭和33年(1958)6月29日付

高齢化による衰退が心配され、若手の養成に力を入れ始めた酒田の花柳界でしたが、労働基準監督署の指導によって18歳以下の半玉がお座敷に上がれなくなり、今後の対策を思案しているという内容の記事が掲載されています。終戦から10年以上が過ぎ、芸妓を取り巻く環境が変わってきたことが分かります。